

# 規範との格闘か、はたまた戯れか

Katherine Philips と Anne Bradstreet の詩に見られる夫婦間の友情

竹山 友子

## 1. はじめに

初期近代英国において推奨された友愛結婚では、これまでの愛とは無関係の家父長的な結婚観とは違い、夫婦間の友愛・友情を理想とする結婚観が推奨され始めた。例えば、王女時代のメアリー1世の家庭教師だったファン・ルイス・ヴィヴェスは *The Office and Duetie of an Husband* で妻を友人またはそれ以上に位置づけたうえで、友人と同じように妻に助言者としての役割を授ける。ピューリタンのロバート・クリーヴァは *A Godly Forme of Household Government* で夫と権威において妻が平等であると主張する。しかし、夫が妻に対して権威を持つことを定めた法的・文化的伝統は、夫婦間において権力の不均衡を生み出すため、平等関係を理想とする友情の一形態として友愛結婚をみなすのは難しいように思われる。本発表では女性の友情がどのように捉えられていたのか、新たな規範の友愛結婚とは従来のジェンダー規範を超越して夫婦間に対等な友情関係を育むものなのかを、当時の結婚観・友情観を軸にして、夫を“friend”と呼んだ詩を書いた二人の女性詩人、主にウェールズに滞在しながら友情を前提とする友愛会を主宰したキャサリン・フィリップスと、ピューリタンとしてニューイングランドに植民したアン・ブラッドストリート の詩を紐解きながら明らかにする。

## 2. 夫婦関係と女性の友情

古代ギリシア・ローマから続く伝統的友情観における女性と結婚の位置づけに着目する。初期近代の思想の礎となる友情観を論じる作品としては、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』とキケローの『友情について』が中心となる。いずれも、理想的な友情とは友人同士に徳の点で同質性・類似性が見られ、対等な関係であると主張する。しかし両者ともに理想の友情は男性同士のホモソーシャルな友人関係を想定しており、異性間や女性間の友情については想定外のように、女性の友情そして夫婦間の対等な関係を認めず、友情論から女性を排除する。このような古典的友情観は初期近代の代表的思想家モンテーニュに引き継がれる。そして元来キリスト教は、新約聖書「コリントの信徒への手紙一」で使徒パウロが「すべての男の頭（かしら）はキリストであり、女の頭（かしら）は男であり、キリストの頭（かしら）は神である」（11章7節）と述べるように、家父長的な結婚観と女性の従属性を説くが、英国国教会祈祷書にもこれに準じた言葉が記されている。旧来の結婚観も友情観も女性を「弱きもの」と位置付けている。

## 3. キャサリン・フィリップスの場合

キャサリン・フィリップスは1640年代後半から天然痘で亡くなる1664年まで執筆活動を続け、彼女自身は“our Society”と呼んだいわゆる友愛会（Society of Friendship）となる文学サークルを主宰した。そのサークル内でフィリップスは自分自身をオリンダ（Orinda）と称し、会員である友人たちに各々別名を授けた。フィリップスの詩のほとんどは友人や知人についてフィリップス自身が一人称の語り手となって語るものであり、特にルーケイシア（Lucasia）と名付けた女性への友情を歌う詩群が有名である。フィリップスは女性の友情すなわち異性間および女性間の友情を重んじる友愛会を主宰したが、彼女と親交のあった男性で友情に関する論を発表した二人の人物、法廷弁護士で詩人のフランシス・フィンチと英国国教会牧師で共和制時代はフィリップスが暮らすウェールズに滞在したジェレミー・テイラーの友情観をその背景として精査する。

フィンチの友情論の特徴は、性別でその性質に大きな違いを見せないことと、妻としての義務による制限の可能性を示唆するものの、それを男女の能力差で語らないことである。彼の友情論はオリンダとルーケイシアの友情を模範としており、その身をもって異性間の友情の存在を示す。一方、ジェレミー・テイラーは、1657年にフィリップスへからの手紙への返答となる *A Discourse of the Nature, Offices and Measures of Friendship* を出版する。テイラーの友情観は女性を排除せず、夫と妻の友情関係や男女間の友情を否定しないが、従来のキリスト教に基づく男女観を大きく反映して、友情の質の差を男女の能力差に基づいて語る。しかしながら、女性にある程度寛容なフィンチとテイラーの友情論は、伝統的友情観とは一線を画すものである。

フィリップスの詩“Friendship”と夫ジェイムズ別名アンテノルに宛てた詩“To My Dearest Antenor on His Parting”の両方に見られる“impression”の語と、後者の詩に見られるフィリップスの胸中の夫の像に対する“friend”という呼びかけにより、フィリップスが夫自体を「わが友人」とみなしていることが判明する。さらに別の詩“A Friend”における詩人と友人の語の並置により、夫は神が定めた友人であり、神が定めた詩人としての自分が友愛詩を書く相手であることが示唆される。

#### 4. アン・ブラッドストリートの場合

アン・ブラッドストリートは 1628 年の結婚から 2 年後の 1630 年に、マサチューセッツ湾植民地の副総督、後に総督となる父トマス・ダドリーおよび父の補佐官である夫サイモンとともにアメリカに入植した。彼女が夫に向けた詩の中で夫を “My head” と呼ぶことから、家父長制に基づく結婚観を彼女が支持しているように思われる。これは彼女たちの植民活動のリーダーで総督となったジョン・ウィンスロップをはじめとするピューリタンたちの伝統的な家父長的夫婦観の影響と考えられる。しかし一方で、ブラッドストリートは出産前に死を覚悟して夫宛てに書いた “Before the Birth of One of Her Children” で自分のことを “thy friend” と呼ぶ。これについては、ブラッドストリートが若い頃から崇拝してその頌詩を書いたデュ・バルタスの *His Devine Weekes* の影響があると考えられる。その中でバルタスは結婚を “chastest friendship” と述べ、夫婦間の友人関係を示す。また、ピューリタンの牧師ダニエル・ロジャーズは *Matrimonial Honour* において「夫婦は親友のような関係であるべきだ」と主張する。父トマス・ダドリーのもとで高い水準の教育を受けたと思われるブラッドストリートは、妻の読書と執筆にも否定的で父権的なウィンスロップの結婚観ではなく、自分自身の信仰と自身が受けた人文教育をその基準として、友愛的な夫婦関係を築いていったと考えられる。

#### 5. まとめ

ブラッドストリートよりも少し後になるが、ピューリタンのジョン・コットンが 1694 年に行った婚姻の説教では、夫婦関係について「妻は夫の助け手であるべきで、家庭の管理者 (keeper) であるべきだ」と述べている。この言葉は、創世記のイヴが創造される理由としての神の言葉「彼にふさわしい助け手」としての役割を想起させるが、コットンは妻の「助け手」としての役割を「家庭の」と限定してはいるものの「管理者」として捉えている。フィリップスとブラッドストリートにとって、妻として詩を書くことは「夫にふさわしい助け手」そして「管理者」としての役割になるのではないだろうか。女性にとっては詩作そのものが理想的妻像を求めるジェンダー規範から逸脱する恐れがある一方で、そのジェンダー規範を内包する友愛結婚という規範に対しては、詩作を逆手にとって戯れているように感じられる。キャサリン・フィリップスとアン・ブラッドストリートはともに夫を立てつつも女性詩人としての矜持を示し、夫の「助け手」「助言者」かつ自身が主宰する世界の「管理者」となることで、ジェンダー規範を超越し、理想的な友愛結婚の基盤となる夫婦間の友情関係を築くことができたのではないだろうか。

#### 主要参考文献

- The Book of Common Prayer 1559: The Elizabethan Prayer Book*. Edited by John E. Booty. U of Virginia P, 2005.
- Bradstreet, Anne. *The Works of Anne Bradstreet*. Edited by Jeannine Hensley, Belknap P, 1967.
- Cleaver, Robert. *A Godlie Forme of Hovseholde Government: For the Ordering of Priuate Families, according to the Direction of Gods Word*. 1598.
- Cotton, John. *A Meet Help, or, A Wedding Sermon Preached at New-Castle in New-England, June 19th 1694*. Boston, 1699.
- Du Bartas, Guillaume de Salluste. *Du Bartas His Diuine Weekes and Workes Translated: And Dedicated to the Kings Most Excellent Maiestie by Josuah Syluester*. 1611.
- Finch, Francis. *Friendship*. 1654.
- The Holy Bible: King James Version*. Ivy Books, 1991.
- Montaigne, Michael de. *Essayes Written in French by Michael Lord of Montaigne*. Translated by John Florio, 1613.
- Philips, Katherine. *The Collected Works of Katherine Philips: The Matchless Orinda. Vol. I: The Poems*. Edited by Patrick Thomas, Stump Cross, 1990.
- Rogers, Daniel. *Matrimonial Honour: The Mutuall Crowne and Comfort of Godly, Loyall, and Chaste Marriage*. 1642.
- Taylor, Jeremy. *A Discourse of the Nature, Offices and Measures of Friendship, with Rules of Conducting It. Written in Answer to a Letter from the Most Ingenious and Vertuous M. K. P.* 1657.
- Vives, Juan Luis. *The Office and Duetie of an Husband, Made by the Excellence[n]t Philosopher Lodouicus Viues*. Translated by Thomas Paynell, 1555.
- Winthrop, John. *Winthrop's Journal "History of New England" 1360-1649. Volume II*. Edited by James Kendall Hosmer, Charles Scribner's Sons, 1908.